

キリスト教における天国—古代世界から現代神学まで

同志社大学 神学部 こはらかつひろ 小原克博

1. はじめに

1) 第1回目の講演(徳永先生)を振り返って

惠範講座の経緯(国際社会を意識して)、浄土と天国、ファンダメンタリスト、「復活」

2) なぜ「天国」を問うのか

- ・イマジネーションの源泉としての天国: 宗教、芸術、文学における多様な描写
- ・浄土真宗とキリスト教(特にプロテスタント)の近接性

「山里の暮らしは、魚や鳥獣を獲って食うという殺生をせずには成立しないのである。仏教は殺生は墮地獄とおしえてきたために白川谷のひとびとは自分の後生を怖れた。そういう後生への恐怖心が、この谷に浄土真宗が入ることによって消滅した。」(司馬遼太郎『街道をゆく』4、徳永先生配付資料より引用)

2. 天国の類語および近接テーマ

- 1) 神の国、復活、最後の審判、煉獄・地獄、魂(永遠の生命)
- 2) 来世(死後生)観、終末論

3. 古代人の世界観

1) 天国の多層性

キリスト教の「天国」は、ギリシア・ローマ文化とヘブライ文化(旧約聖書の伝統)の両方からの影響を受けている。両立させることは困難(特に身体観が大きく異なる)。教会教父たちは、本来矛盾する「靈魂の不滅」と「肉体の復活」の両方を受け入れていく。

2) 聖書における記述

- ・ルカによる福音書 16:19-31 金持ちとラザロ(イエスによるたとえ)

「そして、金持ちは陰府でさいなまされながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。」(16:23)

- ・コリントの信徒への手紙一 15章 キリストの復活と死者の復活

「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。」(15:12)

- ・テサロニケの信徒への手紙一 4:17

「それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。」

4. 天国の歴史——終末論の変遷

- 1) 宇宙的終末論（キリスト来臨の期待）から個人的終末論（魂の救済）へ
- 2) 天国（と地獄）の道徳的機能——特に中世カトリック世界において
- 3) 天国に対する批判とイメージの変化（死後の再会）——特に啓蒙主義以降
フォイエルバッハ、マルクス、フロイトにおける天国批判の系譜

Imagine by John Lennon

Imagine there's no heaven	Imagine there's no countries
it's easy if you try	it isn't hard to do
no hell below us	nothing to kill or die for
above up only sky	no religion too
imagine all the people	imagine life in peace...
living for today...	

5. 現代神学の中の「天国」——R・ブルトマンの「非神話化論」を事例として

非神話化論：ルドルフ・ブルトマン（1884-1976、ドイツの新約聖書学者）が1941年の講演「新約聖書の宣教の非神話化（Entmythologisierung）の問題」において提唱。以下の引用は『イエス・キリストと神話論』（1958年）（『ブルトマン著作集』14巻所収）より。

イエスの説教をはじめ、新約聖書全般にひとしく前提されている世界理解もすべて神話論的である。すなわち、天上界、地上界、冥界の三階層に分けられている世界の表象、万物の有為転変には超自然的な諸力が介入するという表象、奇跡、とりわけ超自然的諸力が靈魂の内的生活にまで介入するという表象、さらに人間が悪魔によって誘惑され、墮落させられ、悪霊にとりつかれるという表象がそれである。このような世界像をわれわれは神話論的と名付けるのであるが、それはこうした世界像が古代ギリシア以来科学によって形成され、展開され、すべての現代人に受け入れられてきた世界像とはまったく相違しているからである。（185頁）

われわれはこうした終末論的説教と全体としての神話論的言表が、神話の覆いのもとに深い意味を秘めているかどうか、そのことについて問わねばならない。もしそうであるならば、われわれはまさにそのより深い意味を手にするために、神話論的諸表象は棄ててもよい。神話論的表象の背後に隠されたより深い意味の再発見をめざすこのような新約聖書の解釈法を、私は「非神話化」——たしかに不満足な用語であるが——と名付ける。（187頁）

非神話化の試みは次の重要な洞察から始まる。すなわち、キリスト教の説教は神の命令によって、また神の名において、神の言葉を説教するものである限り、理性によって受け入れられたり、あるいは逆に理性の犠牲によって受け入れられるような教えを提供するものではないということ。（中略）非神話化の試みは、究極的には説教がもつ任務を、こうした個人的な使信として明らかにすることをめざしている。そうすることによって非神話化

は、偽りのつまづきを除去し、真のつまづきを、すなわち十字架の言葉を人々に注視させるのである。(200-201 頁)

神の言葉は確かに神の永遠の言葉である。しかしながら、この永遠性は無時間性として理解されてはならないのであり、つねにここでいま起こる現在として理解されねばならない。(232 頁) →実存的解釈

6. まとめ——彼岸的なものを考えるために

1) 神話と歴史(科学的合理性)の関係

豊穡なコスモロジーの回復が求められているのではないか。

2) 現代人にとっての天国——キリスト教の多様性の象徴

参考：米 Gallup による調査(2007 年 5 月)

	Believe in	Not sure about	Don't believe in
God	86%	8%	6%
Heaven	81%	8%	11%
Angels	75%	11%	14%
The Devil	70%	8%	21%
Hell	69%	8%	22%

3) 彼岸と此岸の間の往還運動を支える力

バーチャルとリアルの間で生きる現代人にとっての課題

【参考文献】

J. B. ラッセル『天国の歴史——歌う沈黙』(野村美紀子訳) 教文館、1998 年。

アリスター・E・マクグラス『キリスト教の天国——聖書・文学・芸術で読む歴史』(本多峰子訳) キリスト新聞社、2006 年。

ルドルフ・ブルトマン『新約聖書と神話論』(山岡喜久男訳) 新教出版社、1999 年。